

# スペイン語冠詞の史的発達について

近松洋男

## はじめに

冠詞の史的発達を見るに当っては必然的に俗ラテン語から中世スペイン語への冠詞の発達史を調べることになる。古典ラテン語に冠詞はない。しかし俗ラテン語では *ille* や *ipse* が多分に指示形容詞的価値を保ちつつも、あたかも定冠詞の先駆けであるかのように可成りの頻度をもって現れてくる。スペイン語冠詞の形態が整うのは11世紀の変動期を経て、12世紀になってからのことと思われ、13世紀以降の古文書では形態上の不安定は見られない。しかし当時の会話体を反映している劇作品で見ると限りは16世紀前半に到ってもまだ不安定な姿を残している。口語に於ける冠詞の完成は17世紀をまたねばならなかったと思われる。筆者の観察、判断を交えつつ冠詞の歴史を追ってみることにする。不定冠詞については発達も遅く、従って主として定冠詞を取り上げて論ずることになる。第二章、十一世紀「定冠詞語形変動時代」についてのみは Menéndez Pidal の調査に準拠したことを此処に断っておく。

## 第一章

### 俗ラテン語時代

#### § 1. 5世紀 (Biblia Vulgata の時代)

古典ラテン語では冠詞はない筈であるが、Egeria 童貞様と呼ばれた、テオドシウス帝の親戚になる Silvia de Aquitania の作とされる聖地遍歴記 (Manuel C. Díaz y Díaz 著 *Antología del Latín Vulgar*, Gredos 社版参照) (415年~418年に書かれたようである)を見ると、作者がスペイン西北部ガリシヤの生れであることもあって、ロマンス語への変遷の前奏曲を聞くかの如く幾つかの俗ラテン語の特徴を示している。とりわけ *ille*, *ipse* の定冠詞的用法が見られて興味深い。ちなみに同じ時代の *Biblia Vulgata* ではこの傾向は殆ど見られない。例を上げると、

*Pervenimus ergo ad summitatem montis illis, ubi est nunc ecclesia non grandis in ipsa summitate montis* …(その後私達はその山の頂上に着きました。其処、その山の頂上には今、大して大きくない教会があります。)(上記テキスト P.81, L. 45~46)

試みにこの旅行記の始めの46行中でこういう用法の *ille*, *ipse* を拾い上げると夫々7例、3例となっている。

これと比較する為に同時代に書かれた *Biblia Vulgata* で *ille* の用法を見ると S. Marcum 第一章から第五章までで2例あるに過ぎない、しかも明らかに指示形容詞である：

1-9 *Et factum est : in diebus illis venit Iesus a Nazareth Galilaeae : et baptizatus est a Iohanne in Iordane.*

此処で *in diebus illis* は、1260年?に出た最初のカスティリヤ語聖書で *En aquellos días uino Ihesus de Nazareth de Galilea, e bateol Iohan en Iordan* (Thomas Mont-

gomery; El Nuevo Testamento, BRAEanejo XXII, Madrid, 1970)となっていて、en aquellos días「その頃」の意味で illis は定冠詞的用法ではない。二例のうちの他の一例も同じ in illis diebus である。

俗ラテン語聖書では ille の頻度、用法からみて、上記旅行記とは反対に、ロマンス語化傾向に背を向けていたと判断出来る。

## § 2. 6 ~ 7 世紀

スペインの俗ラテン語文書で適当なものが見付からなかったので、スペインから離れるけれど、当代の俗ラテン語の姿を見るために los francos ripuarios の法 Lex Ribuarria に例を取ってみた：

Et quanti super illos IV fuerint, unusquisque ter quinus solidus noxius iudicetur. (上記俗ラテン語テキスト P. 162, L. 56 ~ 57) (それらの四項目にかかわった者は……) ここで illos は定冠詞的な価値を持った指示形容詞である。

## § 3. 8 世紀

§ 2 の場合と同じ立場で leges barbarorum の一つである Lex Romana Raetica Curiensis に例をとると：

a) Quicumque homo, qui ad filium suum et ad extranum hominem de facultatem suam ad ambus cartam fecerit et filiam habuerit, ille filius et ille extraneus ad illam filiam de suas porciones, quod per cartam acciperunt, terciam partem ei dent; quod si duo fratres fuerint et tercius extraneus et ad totus tres equales cartas factas fuerint, illi duo fratres de suam porcionem ad suam sororem terciam dent, et ille extraneus illam suam porcionem, hoc est illam mediam facultatem, in integro sibi vindicavit. (上記俗ラテン語テキスト P. 163, L. 66 ~ 74) (如何なる人でも、自分の財産について我が息子及び他の男の兩名に遺言状が作ってあって、しかも一人の娘がある場合、その息子とその男はその娘に、遺言状によって受け取った彼等の取り分のうち、三分の一を彼女に与えるべきである。もし相続人が二人の兄弟と第三者であって三人に対して三通の等しい遺言状が作られていたら、それらの二人の兄弟は自分達の取り分から自分達の妹に三分の一を与え、その第三者は彼女にその取分、この場合は受けとるその財産の二分の一になるのであるが、それらを合わせてその娘の所有に帰したのであった。)

此处でゴシック体の語は定冠詞の性格を持っており、とりわけ illam suam porcionem は中世スペイン語で la su porción, 近代語で la porción suya となったもので、指示形容詞というよりは定冠詞の性格を持ち始めていることが分る。

b) De omnem rem, unde unus ad alterum hominem debitor est, Si ipsi debitor mortuus fuerit aut forsitan de patria migraverit, omnem ipsius debitum sui heredes, qui eius facultatem habuerint, solvantur. (上記俗ラテン語テキスト P. 163, L. 62 ~ 65) (或る人が他の人に債務を負っているあらゆる事柄について、もしその債務者が死んだり、あるいは多分故郷から移住したりして、彼の財産を貰った人は彼の相続財産のうちその

全債務を赦免される。)

ここで ipse > esse > ese 「その」なる指示形容詞が定冠詞的に用いられているのが分る。

a), b) の例で 8 世紀の俗ラテン語ですでに定冠詞の概念が出来ていることが分る。

#### § 4. 9 世紀

9 世紀スペインの俗ラテン語記録が残っている。Crónica de Alfonso III P.23 Asturia 883 年 (Edición e índices preparados por ANTONIO UBIETO ARTETA, Vatenda 1971) :

et omnem patriam illam conturuavit. (それは全祖国をかえてしまった。) L. 10.  
Illius (= Illo) quoque tempore CCLXX nabes sarracenorum Spanie litus  
sunt adgresse. (またその時にサラセン人の 270 隻の船がスペインの海岸に攻め込んで来た) L. 20  
~ 22.

もはや 9 世紀には ille は定冠詞になっている。

#### § 5. 10 世紀

(Uendimus tertia parte de molino qui est ala (= a la) de Nafarruri. (971 年 Ibeas de Jurros, Menéndez Pidal, Orígenes より) (ナフェルリ泉のほとりにある粉ひき場の (権利の) 三分之一を我々は売った。)

此処ではすでに近代形定冠詞 la が見られる。

## 第 二 章

### 十一世紀、定冠詞語形変動時代

Menéndez Pidal, Ramón の Orígenes del Español, p. 330 ~ 340 による、スペイン内、地域別の変動を見る :

#### § 1. León

1° ille は主格以外、illu は主格に対して用いられた。

i) majurino de ille rex. (その王の主だった臣。) 1089 年 Sahagún 627°. 語尾の -e は曖昧音であるが、殆ど黙字であった。

ii) illo alio (ほかのもの。) 1055 年 Eslonza, Colecc. P. 67.

iii) illos duos solares que sunt circat illu solare de Uinas. (ビーナスの屋敷の近くにある二つの屋敷。) 1084 年 Sahagún 610°

iv) ela aqua de illa fonte. (その泉の水。) 1063 年 León AE.

2° ille の語尾脱落は 11 世紀中頃以来見られる。ante illo rex, quiso el comite …… (王に対抗して委員会は望んだ……) 1055 年, Pámanes.

3° 少々変わった形。

attallaqua = 'hatta' lla aqua', hasta el aqua, (水でさえ。)

alia terra ennas Quintanas = otra tierra en las Q. 1084 年 Sahagún 612°

pongo ad tibi . . . mea ereditate ala mercede, et alia terra jnnos pratos. (私の遺産をあなたにお譲ります。さらに牧草地にある他の地所もね。) 1087年, Sahg. 621°

4. 前置詞の後の (ille > ) elle.

i) 語頭の -e の脱落は語尾の -e の脱落よりも先行, (e)le.

enne ('en le', 後に en el) Monasterio. 1245年,

tras le palacio, tras le molino. 1258年,

ii) しかし母音で終る前置詞の後では de (e)lo:

例えば alferes de lo rex. 1171年, Sandoval p-4. これと並んで el(e) となる: del, al.

§ 2. Región Navarroaragonesa.

十世紀の二つの註釈本 Glosa Emil. と Glosa Sil. はリオハ方言を色濃く反映している。

1° 冠詞は illu の形のみ

i) 男性単数 **elo** terzero, Gl. Emil. 9.

ii) 男性単数 **elos** serbicios Gl. Emil. 18. **elos** cuerpos. Gl. Emil. 327.

iii) 女性単数 **tienet ela** mandatione . . . **denante ela** sua face. (彼は自分の顔の前へその贈物を持ち上げる。) Gl. Emil. 89.

iv) 女性複数 **elas** qui = *las* que. Gl. Sil. 204.

2° -e で終る前置詞の後で、de + lo.

i) 男 単 de **lo** aduersario 敵の. Gl. Sil. 96.

ii) 男 複 de **los** sículos (= de *los* siglos) Gl. Emil. 89.

iii) 女 単 ueuetura (= bebida) de **la** ierba. Gl. Sil. 21, 68, 171, 194, 298, 340.

iv) 女 複 de **las** tierras. Gl. Sil. 360.

a の後、por の後も同様。(例は省略)

3° 語尾 -n を持つ前置詞の後で ello の e- が落ち l- は前置詞の語尾 -n に同音化:

cono Parte, cono Spritu. Gl. Emil. 89.

conos otros (= con *los* otros). Gl. Sil. 65.

eno periculo (= en *el* peligro). Gl. Sil. 47.

enos sículos (= en *los* siglos), ena honore. Gl. Emil. 89.

4° Navarroaragonés 古文書は latinismo を通じて glosas の古い形を保存している。

i) **denante illo** abate. 943年. SJ. Peña 381°.

**de illa** kasa, **ad illa** infante. 1029年. SJ. Peña 388°. **per illo** kaballo. 1062年. SJ. Peña.

しかし地域により時期によって古い語形に交じってこれらの註釈本の古い形よりも近代的語形を残している場合もある。

《 **dedimus te illos** ambos *los* molinos, **illa** terra de *lo* pago cum sua semente, in **illos** molinos de Cinca **ad illo** Tollare. 》1096年. S. Victorián. (シンカからトリャーレ川に到るまでの諸所の粉ひき場の中にある風車と播種育苗畑付きの債務支払い用の土地との両方を貴殿に引き渡す。)

ii) Alto Aragón と Jaca などでは古い形 lo とその派生語 o が未だに保存されている。

**lo fuego** (Hecho 村 etc.), **O fuego** (Jaca とその周辺部)

cfr. ポルトガル語冠詞近代形。

しかし **el fuego** がカタルーニャとの国境部の Sobrarbe で見られ、カタルーニャ側でも **el foc.** (San Esteban de Litera), しかし **lo llom** ( Tamarite で)。

Sobrarbe では **illo** と **ero**, **illa** と **era**, 中性形 **illo** と **ero** の共存が見られる。

{ **tuto illo abere.** (全財産)  
**ero cabalo.** (馬) etc.

{ **illa mula.** (騾馬)  
**eras equas.** (馬) etc.

{ **faca lo suo.** (自分の事は自分でやれ )  
**ero melio pan, ero melio de ueno.** (よいパン、よい酒)

{ **ad illos mancepos.** (若者達に )  
**aro mancebo.**

iii) Alto Gascón の冠詞 **el** は Gasconia の他の部分の **lu** と対立していた。

Alto Aragón は Alto Gasconia と共に **el** を用いず **lo** または **o** であったが、fonética gascona で **-ll-** > **-r-** が一般的なもので上記 Sobrarbe の **ero** 形、**era** 形は Gasconia の影響と思われる。( Gascón 方言には **ero, era** なる冠詞はない。)

§3. カスティリヤの冠詞が一番早く発達していた。

i) **illu** の例は少い。

**illo semdario, de illo monte, de illa uia, etc.** 1011 年. Valpuesta.

前置詞とくっついたものとして **en lo soto.** (12 世紀の終り頃)

ii) カスティリヤ語古文書のごく古いものでも近代形の冠詞となっている。女性冠詞語頭の **e-** はなくなっており、男性冠詞 **ille** の語尾 **-e** も無くなっている。

**por el semdero** (= senda), **al semdero, alos planos,** 1063 年. Oña.

iii) しかし 13 世紀になっても **ela, elos** なる語頭 **e-** をもった形も見られた。

**elo** (= *lo*) que avemos **enel** molino, 1245 年. Sigüenza, DL, 257° 29.

**Y ela** (= *Y la*) otra que tenga Martin Royz, ... 1314. Castilla del Norte, DL 70° 45.

iv) **enna** < **in -(i)lla** の例は多い。

**enna** Gandara, 1147 年. Santoña Cartul., fol.41 v.

勿論男性では同音化はなくて **enel**.

**enel** Pinero, 1210 年. Santoña, DL. 4°.

§4. *Lat. ipse* > *Cast. med. esse* > *Cast. mod. ese.*

**ille** と並んでスペイン全土で指示形容詞の **ipse** が定冠詞よりは少し軽い気持で用いられた。

**super ipsa uia, illa** Karreira, 938 年. Monzón de Campos.

**isso prado.** Glosario.

軽い冠詞として後ながらく保存された *esse* (M<sup>10</sup> Cid, p. 330, etc) > *ese* はこれから出た。

これよりの派生語 *so, sa* あるいは *es, sa* はカタルーニャ全域とガスコンに用いられたが今は Balears 諸島のカタラン語、Sardinia 語に見られるのみとなっている。

§ 5. トレドのモスアラベ *ille* > *le*.

この男性定冠詞 *le* の複数形 *les* は女性複数に対しても用いられた。

de *les meas kasas* (= de *las casas mías*).

de *les maiolos*. 1146 年. Toledo, DL. 259<sup>o</sup> 4, 5.

### 第 三 章

12 世紀から 16 世紀まで

§ 1. 1235 年 8 月 20 日、Fernando III の三地方会和解証書。

Dono itaque uobis quod unumquodque concilium cognoscat suos terminos et laboret et populet quantum poterit in *illis locis* que iam fuerunt laborata et populata. (そんな訳で各民会がその目的を知り、すでに耕やされ入植された場所で出来る限り耕作し住みこめるよう諸君に申し渡す) (Manuel Nieto Cumplido: Orígenes del Regionalismo Andaluz. Publicaciones del Monte de Pidal, Córdoba, P. 117)

指示形容詞 *illis* が定冠詞のように用いられている。

§ 2. Manuscrito aragonés de Escorial I. J. 8. del origen Fol. 208 v<sup>o</sup> (1251 ~ 1284)

Un hombre fue en \* tierra de Hus que avia \* nombre Job, et aquel hombre era simple et derecho et .... quito del mal. Et ovo (= *tuvo*) siete fiios (= *hijos*) et tres fiias. Et fue su heredamiento siete mil ovejas et tres mil camelos et quinientos jugos de bueys et quinientas asnas et × muy grant compayna, et era × grant hombre entre todos los orientales. (Les Bibles Castellanes, P. 379)

Fol. 204 Ca nos es nasçido el pequennuelo y es dado × fijo a nos y × sennorio ( *ser á* ) fecho sobre el su onbro. ( 上記テキスト P. 380 )

この二例で定冠詞\*、不定冠詞×があるべきところがないのに気が付く。

Manuscrito de Escorial I. J. 4 XLII, 13. E nascieronle syete fijos e tres fiias, e llamo \* nombre de la una (= *la primera*) Yamina, e \* nombre de la segunda Quiçia, e el de la terçera Queribabim . . . e Iob murio viejo e farto de dias. ( 同テキスト P 405 )

これを見ると、定冠詞\*があるべきところがないばかりか、*una* が *primera* の代用となっていることに興味をひかれる。

Ps. CI. fecho so (= *soy hecho*) commo × paxaro solo en la casa. ( 同テキスト P 405. L.-1 ) (私は鳥のように家で一人にされている。) *so* = *soy*, しかしこの頃は *estoy* の意味で用いられている。

*paxaro* の前の不定冠詞がないことに注意。

### §3. 古いカスティリヤ語の聖書

不定冠詞がないことでは次の例でも上の例と同じ。カスティリヤ語で書かれた最初の聖書(1260年?) (Thomas Montgomery: El Nuevo Testamento) の San Marco I. 22. E marauillauan se del so saber, ca les preygaua como × ombre que auie poder, e non como × maestro. 23. E auie en la synoa un ombre que auie × demonio, e metio × grand uoz.

これを1622年の Bear Bible を比較すると: 22. Y espantauanse de su doctrina: porq̃ los ense ñ aua como *quien tiene potestad*; y no como *los* Escribas. 23. Y auia en la Synoga deellos vn hombre *con espirtu immundo*, el qual dió bozes.

13世紀の聖書にみられる冠詞の問題は17世紀聖書で解決されていることが見られる。

### §4. 定冠詞 ell

16世紀の第一四半世紀までいろいろな中世の特性が残されるのであるが、冠詞については男女両性定冠詞 *ell* を此処で取り上げる必要がある。スペイン・ルネッサンス劇の始祖、トレス・ナアロは彼の劇集 *Propalladia* で当時としては最新の *Erasmismo* を古いスペイン語を駆使して高らかに歌い上げたのであるが、定冠詞については母音ではじまる名詞につく定冠詞は性に拘らず *ell* の形を用いているのが際立っている。

(*ille* >) *ell(e)* + 母音、この冠詞の *-ll-* は口蓋音化していた様である。

- i) *ell ajo.* Troph. II. 301.
- ell alma.* Aqui. III. 573.
- ell apero.* Troph. IV. 188.
- ell apito.* Jac. Intr. 74.
- ell atar.* Ser. Intr. 113.

(*bailaua*) d'este modo palaciego, / *habró ell* alcalde en llegando. *Aqui. Intr. 29.* (私は例の宮廷式のやり方で踊っていたのですが、舞踏の主役は私の処へやって来るや開口一番私をほめてくれました。)

- ii) *ell Escalco* = *el Escalco*. 給仕頭、Troph. II. 453.
- iii) *ell ojo.* Troph. II. 153.
- ell otro.* Troph. II. 210.

この *ell* は前に *de* や *que* がある時は 'll' となった:

- d' *lligreja* = *de la iglesia*. Troph. II. 7.
- que' *ll oveja* más vellaca = *que la oveja* ... Troph. IV. 21

俗ラテン語	中世カスティリヤ語	現代カスティリヤ語
<i>ill(a) anima</i>	> <i>ell alma</i>	> <i>el alma</i>
	<i>ell oveja</i>	> <i>la oveja</i>
	<i>ell ajo</i>	> <i>el ajo</i>

口蓋音冠詞から現代カスティリヤ語に見られる最終段階に進むのであるが、その為には17世紀初頭まで、さらに一世紀の年月をかけなければならなかったのである。此処で定冠詞の長い成育期間をやっと終えるのである。

(終り)

## 参 考 文 献

1. Manuel C. Díaz y Díaz : Antología del Latín Vulgar, Gredos.
2. Colunga-Turrado : Biblia Vulgata. Biblioteca de Autores Cristianos.
3. Thomas Montgomery : El Nuevo Testamento. BRAE anejo XXII, Madrid, 1970.
4. Bear Bible, 1622.
5. R. Menéndez Pidal: Orígenes del Español. Espasa-Calpe, S.A.
6. Manuel Nieto Cumplido : Orígenes del Regionalismo Andaluz. Pulicaciones del Monte de Piedad, Córdoba.
7. Samuel Berger : Les Bibles Castellanes et Portugais.
8. Textos Medievales, 3. Crónica de Alfonso III. Edición por Antonio Ubieto Arteta.
9. Propalladia and other works of Torres Naharro edited by Joseph E. Gillet, Vol. two, collected plays. Bryn Mawr: Pennsylvania, 1946.
10. Torres Naharro: Propalladia, ed. M. Cañete & M. Menéndez y Pelayo, M., 1880 ~ 1900, 2v.